世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The Role of Cooperative Learning in English Education for First Year Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間中, 和歌江 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/523

初年次英語教育で行う協同学習の役割

間中　和歌江

1.　はじめに

大学のユニバーサル化にともなって、大学に求められる学生支援の内容も多様になってきている。奨学金制度などの経済的支援や、学修、生活面でのサポートを担うアドバイザー制度、さらに就職に関する進路相談などその内容は幅広い。橋場（2014）[1)] によれば、大学の認証評価団体が想定している学生支援の役割には、学修の阻害要因となるものをその条件や環境から排除してくことがその大本にあり、その阻害要因の中には、精神的・心理的不安、生活環境の未整備が考えられるとしている。本学でも、4月に行われるオリエンテーションプログラムにおいて、新入生と担当アドバイザーとの懇談や、先輩学生との交流などの機会を設け、新入生の生活環境の整備を行っている。しかし、その後の学生生活の中でアドバイザーが担当するすべての学生と頻繁に顔を合わることは難しく、新入生はむしろ必修授業で毎週顔を合わせる教員とのやり取りの中で学習支援を求めてくるケースが多いのが現状ではないだろうか。授業内で行える具体的な学生支援の方法を考えることは、今後の学生支援の充実のために重要ではないかと思われる。

この研究ノートの目的は、新入生に対して授業のなかで行える学生支援の可能性について、協同学習というスタイルを通して考察を行い、今後検討すべき点を明らかにすることである。そこで平成28年度1、2学期に筆者が行った初年次英語授業において、協同学習で学生同士の人間関係を円滑にし、互いにコミュニケーションのとれる体制を作りながら学生の精神面での支援を試みた過程について報告し、今後の課題を提示する。

2.　学生支援の観点から「授業」にできること

学生支援の成果は、大学中退者の減少というかたちでも見えてくる。中退の理由は経済的なもの、学力的なものに加えて、心理的、精神的なものも挙げられる。なかでも、濵名（2013）[2)] は学生の心理的、精神的な中退理由の一つに対人関係の不適応、大学という環境への不適応を示している。実際に新入生へ入学時に不安だったことについて尋ねると、「知っている人がいないこと」「友達ができるかどうか」などが挙げられ、初対面の他者との関係作りに不安を抱いていることがわかる。清水、阿部（2011）[3)] では、学内の精神衛生の向上を図るためには、「予防」の観点から問題の早期発見が重要であり、必要に応じて働きかける支援体制の必要性が述べられている。

そこで、先述のように、毎週同じ学生と対面している授業担当者がこの早期発見や予防的支援に加わることを学生支援の一つとして考えた。授業の中で行う学生支援については、すでに体育授業での実践例がある。島本（2011）[4)] は体育の授業を通して、学生のコミュニ

ケーションスキルの育成を図った実践例を述べている。学生が授業内で行うスポーツを通じて他者との活発な交流をはかり、その中で「自己開示」「挑戦達成」などを経験し、「セルフエスティーム（自尊心)」を形成していくという。学生のコミュニケーションスキル獲得に焦点を当てた試みである。この実践は学生がライフスキル「生きる力」を獲得することにつながる学生支援として行われており、体育授業に限らず、大学における多様な授業での実践も調査すべきだと述べている。

3. 協同学習による基本スキル習得で目指す学生支援

学生支援に関するこれらの研究を背景に、筆者は平成 28 年度、１年生の英語１ab の３クラスにおいて、協同学習の方法を用いた授業を行い、そこで学生間の交流をはかりながら不安感を取り除くための活動を試みた。実践に際しては次の３点に焦点をあてた。

① 学生同士の話し合いができるように、英語学習に入る前の段階で交流のための活動を用意する。

② 学生間の交流をより円滑に図るために、ほぼ全員が初めて習得する学習内容を用意する。

③ 自立した英語学習に必要な基本的スキルの定着を目指す。

さらに、これらを実現させるために、構成的グループエンカウンター、協同学習という手法を用い、学習内容としては発音記号と辞書活用の習得を行うこととした。以下にその詳細を記す。

3.1. 構成的グループエンカウンターの実施

初めて出会う学生たちが互いを知り合うきっかけを作るために、構成的グループエンカウンター（structured group encounter）を行った。これは、國分（1981）[5] において、ふれあいと自他発見を目標として、個人の行動変容を目的とした心理教育プログラムで、出された課題に学生たちで取り組むことで心のキャッチボールを行い、徐々に自分や他者への気づきを深めていくものであるとされている。今回の実践では、この手法の中で「おいしい席替え」小林（2004）[6] と名づけられた活動を用いて席替えを行った。詳細は５の実践報告に記すが、初対面ながら他者に興味を持ち、名前と顔をつなげようとする態度が見て取れ、学生間の友好的な関係づくりのスタートとして効果があると思われた。このような互いを知り、自分の本音を徐々に出せる環境づくりは、わからないことを隠してしまいがちな英語の授業では特に必要なことであると考える。間違えてもよい。その間違いに気づき理解し修正していく場が授業にあるとクラス全体で思えるような環境は、効果のある授業にするためには必須である。

3.2. 発音記号と辞書活用方法の習得

本実践では、英語教育の面からは基礎スキルの習得をその目的とした。これはこの授業が大学での英語学習のスタートであり、これからの指導が有効に働くためにも、クラス内の学

生全員がこれらの基礎スキルを確実に身につけているという基盤をつくるためである。またそれ以上に学生支援の面では学生同士のつながりを円滑にすることもねらいとした。島本（2011）[7] では学生のコミュニケーションスキルの獲得をねらった体育授業では、学生における競技の得意・不得意をリセットできる、初めて経験するような競技種目を選ぶことが効果的だとしている。このことから、英語の授業でも学生が初めて学ぶような項目をこの時期に用意することが大切だと考えた。

これらのねらいを達成するために、筆者は発音記号の習得と辞書使用の基本スキル獲得をねらった実践を行うこととした。

まず、発音記号については、本実践を行ったクラスの学生へのアンケート調査を行ったところ、「大学入学前に発音記号を習った記憶がない」という学生が47％であり、「自分は発音記号をきちんとわかっていないと思う」という学生は97％であった。英語の「音」に対して苦手意識があると、学習そのものに支障をきたすことも多い。井上（2015）[8] では、「連結、脱落、同化、弱化といった音声変化はもとより、音素レベルの理解もままならないため、文法導入で使用される基本的な用例を音読することさえ不得手とする大学１年生が年々増えているように感じられる。」と指摘している。また、鈴木・門田（2012）[9] でも「音読指導の孤立化」として、高等学校などでの音読指導が手薄になっている状況が述べられている。

このように大学１年生にとってほぼ初めて学習する発音記号は、先にあげた全員が一からスタートする、学生にとっては他者の英語力をあまり気にすることなく、安心して取り組める項目であり、本実践には適した項目であると考えられた。

次に辞書活用については、小山（2014）[10] で、中高での辞書指導の在り方が活用できるような指導へと転換してきているが、現役大学生の英語学習者にはデジタル、アナログを問わず辞書指導を受けた経験がない者が大半であると指摘されているように、実際に授業で辞書検索をさせても、書いてある記号や支持の意味がわからず、デジタル辞書においては押したことがないキーがいくつもあり、それらの使い方の指導の必要性も強く感じられる。

このように、発音記号と辞書使用の指導は、必要不可欠でありながら、大学入学までには未修得であり、全員が同じスタートラインで一から学ぶ本活動には最適な項目であった。

3.3.　協同学習の必要性

先にあげた島本の実践は体育の授業であり、授業内容が競技である場合には自然と学生が協同学習することになるだろう。関田（2004）[11] によれば協同学習の定義は、「協力して学び合うことで、学ぶ内容の理解と習得を目指すとともに、協同の意義に気づき、協同の意義を磨き、協同の価値を学び、内化することを意図した教育活動」とされている。そして安永（2009）[12] では Johnson, Johnson,&Smith（1991）が提示した協同的な学習環境を創り出すための基本要素、互恵的相互依存、対面的交流、個人の責任、社会的技能、集団改善手続きを挙げながら、これらの要素を満たした授業には、伝統的な知識伝達型の授業に比べ大きな教育的成果が期待できると述べている。

体育授業での実践のように、英語の授業においてもクラス内の他者と協同して課題解決にあたることで、他者を知ろうとする意識を持ち、また同じスタートラインから始める学習内

容に取り組むことで、不安感も少なく効果的に習得に取り組めるものと考えた。

4. 実践報告

本実践は、平成 28 年度の新入生 3 クラスを対象として実施し、参加学生は 59 名である。

また、これらのクラスの学生は個々の理由から入学時のプレイスメントテスト（TOEIC Bridge）を受験しておらず、未受験クラスとして編成された。

以下に本実践の手順と内容を記す。

4.1. 構成的グループエンカウンターを用いた席替え

この席替えは、まずクラス全員が好きな食べ物を発言し、教師がそれを板書する。次に再度クラスの全員が板書された食べ物の中から、今食べたいものを言っていく。この間教師は手元にある座席表に食べ物と学生の名前を記入していくので、学生全員が名前と好みを発表したことで座席が決まるという楽しく公平にできる席替えの手法である。

本活動の制作者である小林（2004）[13] によれば、好きなものや食べたいものを選んだ理由で自己開示が始まるとされており、実際にこの実践の最中も、各自が選んだ食べ物を話題にして会話がスムーズにはじまり、互いに学科を尋ね合うといった自己開示につながった。ほとんど知らない同士が集まった教室の緊張した空気が一気に和やかになり、授業で声を出すことが恥ずかしくない環境づくりができた。その後の授業では、音読を多く行う予定であったため、声を出すことに抵抗が少ない方が好ましく、それには周りを気にせずに声を出せる環境づくりが大切であったので、この活動は大変有効であったと考える。

4.2. 発音記号の学習、その方法

発音記号にもいくつか種類があり、生徒学生向けの英語音声指導書にはおおむね 40～50 個の発音記号が記されている。しかし今回の実践では、1 回の授業で習得できることをねらったため、その中でも学生にとって音と結び付けにくい記号を選び出し、[ə]［ʃ］［æ］［ʌ］［ʒ］などをはじめとする 14 個を指導することとした。

これらの発音記号に、できるだけわかりやすく、かつ面白いエピソードを加えて、音と記号の確実な合致をねらった指導を行った。学生には普段使用している日本語にはない音声を発するため照れる気持ちも生まれがちであるが、先に行った席替えにより座が近くすでに会話をした学生との心理的距離は少なからず縮まっているので、予想以上に抵抗なく大きな声で発音練習ができた。

4.3. 辞書活用指導

対象の授業では電子辞書を教室に持参している学生は少ない。多くがスマートフォンで調べているのが現状である。しかし、ほとんどの学生は電子辞書を自宅には持っているという。今後の英語学習のためにも、せっかく持っているのであるから、その使い方をあらためておさらいしてみようと呼びかけた。幸いグループで一人程度は持参していたので、グルー

プ内で一緒に見るように指示をした。

まず、先に学習した発音記号の書かれている箇所を確認した。次にジャンプボタンを使って、掲示された分の中で使われている語句を他の辞書で調べる作業を行った。さらに、成句やヒストリーといったボタンについても、これまでに触ったことがないという学生は多く、グループ内で話をしながら改めて辞書の機能を確認した。

4.4.　発音記号習得のための協同学習

4.2.、4.3. で学習した内容を使って、発音記号を習得するための協同学習を以下の手順で行った。

①　近い座席の学生 4〜5 人で一つのグループを作り、各自に 1 から 4 の順番を付けるよう指示する。

②　各グループの 1 番の学生を教卓に集める。英語を語源とし、カタカナ表記になっている英単語の発音記号を用意しておき、それを集まった学生に見せる。この際に学生はメモを取ってはならず、示された発音記号をその場で記憶して、グループへ戻り、メンバーの前でそれを書き出してグループの全員に見せる。

③　問題になっている発音記号をグループ内で話し合いながら音声にして、元となっているカタカナ表記を推測する。

④　推測したカタカナ表記を電子辞書の広辞苑で引き、ジャンプボタンを使って英和辞書へ移り、そこで発音記号を見つけて問題の記号と同じかどうかを確認し、グループへ配布された用紙に記入する。

以上を 4 人目まで行い、グループの用紙に正解が書かれているかどうかで勝敗を決める。

4.5.　実践結果、学生の声

この活動の中で、学生たちは次のことを課せられながら参加したことになる。まず、英語学習の面では、発音記号の一つ一つを音として認識できること、電子辞書で複数の機能を使用しながら、求める情報を得られること。次に協同学習の面では、責任をもって課題となる発音記号をグループへ伝えること。課題の発音記号がどのような音を意味しているのかをグループ内で決定するために自分の考える読み方を仲間に伝え、または聞き、正解を出すために話し合いを行うことである。

席替えから協同学習までわずか 90 分であるが、学生同士が話をするためのきっかけと場を設けることで、最初の硬い雰囲気が変わり、ことばを学ぶのにふさわしい環境を作り出すことができた。

この活動が新入生が知り合いをつくるきっかけをつかみ、その後の大学生活を円滑にスタートさせることの助けになったかどうか、いくつかの項目で学生へアンケート調査を行った。まず、席替えとその方法について、この方法が好ましい学習環境づくりの一助となったかどうかについては、90％の学生が「一助になった」と答えている。また、協同学習に参加して、「話したことのない人と知り合いになった」は 89％であった。このように知り合いができたことで、「クラスに知っている人がいると安心する」と答えた学生は 96％であった。

本活動を通して知り合いを作ることが、2回目から授業に参加する際の前向きな材料になっているものと思われる。

また、自由記述で本活動の感想を尋ねたところ、以下のような答えが見られた。

・「みんなで協力してやったので楽しかったし、もっと皆と仲良くなりたいと思うことができた。発音記号も今まで無視してやってきたので意識して読んでみたいと思う。」
・「もっとシーンとしてつまらないかと思っていたけど、とても楽しかった！ぜんぜん知らなかった人とも話せてよかった。この楽しい授業でどんどん英語力を伸ばせたら良いなと思えた。　今日の授業の発音は初めて知ったことが多くて興味が持てました。沢山覚えていこうと思った。」
・「隣の人と話し合うことで、常に自分で考えるようになり楽しく学べた。」
・「みんなで話し合いながら授業を受けたことで、お互いにわからないところを説明し合ったり、声を掛け合ったりして楽しい授業でした。」
・「かかわりが多い授業はたのしい。「みんな」を知っていると声も出る。」

※下線は筆者加筆

下線部の「仲良くなりたいと思うことができた」「英語力を伸ばせたらいいなと思えた」という表現を見ると、他者と仲良くなりたいと思うことも、英語力を伸ばしたいと思うことも、まったく自然に出てくる感情ではなく、別に知り合わなくてもいい、無理をして英語力をのばさなくてもいいと考えてしまうこともあるのだということがわかる。しかし、授業の中で場を設けて環境を整えれば、他者とのつながりの必要性を感じ、自分の学びに活かしていくことができるのだと気づかせることも可能なのである。

5. 考察と課題

本実践の目的である、新入生の精神的不安感を取り除き、大学生活を円滑にスタートさせるという学生支援は、これら学生の声などからおおよそ達成できたものと考える。協同学習というスタイルを用いることで、授業内で行える学生支援の可能性が見えた。教員による授業実践の中には、その内容に加えて、提示方法や授業運営によって学生の精神的なサポートも行えるのだと考える。学生同士をつなぎ、孤立させない環境づくりは授業の中でも行えるだろう。

このような、授業内で行う学生支援に求められるのは、第一に教員のアレンジ力ではないだろうか。席替えを行っても、すべての学生が初対面の学生とすぐに話しを始められるわけではなく、なかにはミスマッチかと思われるグループやペアができてしまうことがある。その際に教員は積極的にそれら学生の間を取り持つようなサポートを行う必要がある。これは単にその場での学生間のやりとりを促すだけでなく、その後の授業で必要となる学生個々の性格や個性などの把握にもつながるだろう。したがって、本実践で見えてきた課題のひとつは、教員の授業におけるアレンジ力、展開力の練磨であると考える。

もう一つの課題としては、初回から複数回欠席する学生への対応である。本活動においても、３回続けて欠席し、４回目から参加した学生がいた。４回目ともなると、学生同士がすでに知り合いになっており、教室には和気あいあいな雰囲気ができはじめている。したがって、その中へ入っていくには初回以上の緊張が予想され、また受け入れるクラスの学生たちにも違った意味の緊張が出てくる。これについてはリメディアル教育学会などでも頻繁に話題になるのだが、参加後のサポート方法を学生本人とクラス全体に向けての二方向で行わなければならないだろう。具体的な方策を考え、一人でも退学、休学をする学生の芽を摘んでいきたいと思う。

学生にグローバルな視点を持たせたい。そのはじめの一歩として、隣にいる他者に興味を持ち、意思を伝えあおうとする姿勢から育てるというステップは必要ではないだろうか。今後は以上のような課題解決に取り組みながら、授業内でも行える学生支援を継続し、さらに効果のある方法を考えていきたい。

引用・参考文献

１） 橋場論：認証評価にみる学生支援の評価—自己評価に焦点を当てて—，大学教育学会誌，2014，第 36 巻，第 1 号，p.80–83

２） 濱名篤：大学中退のとらえ方～マクロな視点から～，大学教育学会誌，2013，第 35 巻，第 1 号，p.12–16

３） 清水直子，阿部裕子：大学生の健康と活力，社会性，大学教育学会誌，2011，第 33 巻，第 2 号，p.92

４） 島本好平：「ライフスキル教育」実践の場としての大学体育授業，大学教育学会誌，2011，第 33 巻，第 2 号，p.94–95

５） 國分康孝：『エンカウンター—心のふれあい』誠信書房，1981

６） 小林正樹：「おいしい席替え」『構成的グループエンカウンター　エクササイズ 50 選』吉澤克彦編，明治図書，2004，p.38–39.

７） 島本好平：「ライフスキル教育」実践の場としての大学体育授業，大学教育学会誌，2011，第 33 巻，第 2 号，p.94–95

８） 井上聡：教科書本文の音読が学習者にもたらす効果，リメディアル教育研究，2015，第 10 巻，第 1 号，p71–79

９） 鈴木寿一・門田修平：『英語音読指導ハンドブック』，大修館書店，2012.

10） 小山敏子：The Impact of E-dictionary Strategy Training on EFL Class 辞書方略指導による検索行動の変化，2014 年度 JACET 全国大会要綱，2014，p.63

11） 関田一彦：創価大学における協同学習法の意味づけ，創大教育研究 Vol.13，2004，p.53–57.

12） 安永悟：協同による大学授業の改善，教育心理学年報 Vol.48，2009，p.163–172

13） 小林正樹「おいしい席替え」『構成的グループエンカウンター　エクササイズ 50 選』吉澤克彦編，明治図書，2004，p.38–39.